

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 24 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370585

研究課題名(和文) グローバル化時代の自己表現のための日本語パブリックスピーキングに関する研究

研究課題名(英文) Research on Japanese public speaking for self-expression in a globalized age

研究代表者

深澤 のぞみ (Fukasawa, Nozomi)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：60313590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)： グローバリゼーションの進む中、パブリックスピーキングの重要性が増している。本研究の目的は、日本語によるパブリックスピーキングの特徴を様々な角度から明らかにし、日本語教育への応用についても検討することである。

その結果、日本語パブリックスピーキングには様々なジャンルがあり、それぞれ全体構成や定型表現などの特徴を有していることがわかった。また、他の言語のパブリックスピーキングと比較した結果、文化による差がある可能性があることも明らかになった。昨今、日本語教育でも21世紀型スキルが重視されつつあるが、日本語パブリックスピーキング指導は新しい時代にふさわしいスキルの伸長に寄与するという結論に至った。

研究成果の概要(英文)： Public speaking is becoming increasingly important in the wake of society's globalization. The purpose of this study is to clarify the characteristics of public speaking in Japanese and to consider the possibility of its inclusion in Japanese language education.

The study revealed that Japanese public speaking consists of various genres, each of which has developmental patterns and formulaic expressions. In addition, the comparison of Japanese public speaking with public speaking in other languages showed a cultural difference. In recent years, Japanese language education for international learners has begun to place emphasis on developing learners' 21st century skills. The research indicated that teaching Japanese public speaking promotes learners' development of new skills.

研究分野：日本語教育

キーワード：パブリックスピーキング 日本語教育 ジャンル

1. 研究開始当初の背景

現在の日本は、グローバル化の影響を強く受けている。日本国内では、総務省が2006年に「多文化共生推進プログラム」の提言を発表して以来、多文化共生社会の実現を目指すようになり、一方、国外ではグローバル化の進む中で近隣諸国との摩擦が時に深刻になっていることを背景に、世界の中での日本人の自己表現法が問われるようになった。

本研究は、専門性および社会性の高い公的な日本語での口頭コミュニケーションを「日本語パブリックスピーキング (Public Speaking)」と呼び、ビジネス場面で活躍する外国人高度人材や、外国の現場と日本の現場との橋渡しをする「ブリッジ人材」に不可欠なものであると考える。さらには、文化や言語の違いを十分理解しながら活動をしなければならぬ日本人のグローバル人材にとっても、日本語のパブリックスピーキングと異なる文化圏や言語圏でのパブリックスピーキングの特徴や差を理解することが、理解不全や誤解を防ぐためにも必要であると考える。

まず筆者らは、H22年度科学研究費補助金による研究「日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した総合的研究」において、「パブリックスピーキング」を定義した上で、現在刊行されている日本語教科書の調査及び、実際に高度人材として活動している外国人日本語使用者にインタビュー調査を行った。その結果、日本語教育でパブリックスピーキング自体は重視されているが、扱われるジャンルには偏りがあること、必要な指導項目などの整理はされていないことがわかった。そして、高度人材として活動する場合に必要なパブリックスピーキングの能力は、従来の日本語教育の中ではカバーされていないこと、大きい文化差や言語差があるため外国人日本語使用者にとって戸惑いが大きいことなども明らかになった。

さらに日本語の式辞スピーチとアカデミックプレゼンテーション(学術発表)を、ジャンル分析(Swales 1990)の手法で分析と考察を行い、典型的な展開パターンやジャンルを決定付ける定型表現の抽出を行った。このことは、2つの代表的なジャンルの特徴を明らかにできたこととともに、パブリックスピーキングの特徴を探るのに必要な分析手法を確立したことも意味するが、他のジャンルの特徴についても、更なる検証の必要性が浮かび上がり、本研究への着想へとつながることになった。

2. 研究の目的

本研究では、3つの視点を研究の軸として設定した。

まず第1の視点は、パブリックスピーキングに含まれる様々なジャンルの特徴を探ることである。全体像ということである。ジャンル分析によって、各々の特徴を明らか

にする。次に、第2の視点は、同一ジャンルであっても、日本語によるもの他の言語によるものとの差異がある可能性があることである。同じような式典での式辞スピーチにしても日本語と、たとえば英語、中国語によるものとの差異がある可能性が示唆された。これは、自らがスピーチをする場合にはもとより、高度人材としての業務によくある社会的地位の高い話者の式辞スピーチの通訳といった場でも問題になる(外交官が行う国家要人の通訳や、国際交流員の自治体の長の通訳、ブリッジ人材が行う企業トップ通訳など)。このようなことを念頭に、パブリックスピーキングの同じジャンルで、日本語と英語や中国語で行われるものとの比較研究を行う。

第3の視点は、新しいパブリックスピーキングのスタイルである。新しいスタイルは、従来のパブリックスピーキングと違うのか、どのような特徴があるのかを見ていく。

3. 研究の方法

本研究では、以下の手順で調査分析を行い、グローバル化が進む時代に適合した「日本語パブリックスピーキング」の教授法を確立することを目指す。

- 1) パブリックスピーキングに含まれるジャンルの分析
- 2) パブリックスピーキングのジャンルにおける言語による差異の検討
- 3) 新しいスタイルのパブリックスピーキングの調査分析
- 4) 上記の結果を踏まえたパブリックスピーキングのシラバスや教授法の検討

4. 研究成果

4.1 研究成果の概要

4.1.1 パブリックスピーキングに含まれるジャンルの分析

これまでパブリックスピーキングに含まれるものとして、式辞スピーチ、アカデミックプレゼンテーション、スピーチ大会のスピーチなどの調査を行ってきたが、本研究では、後述の4.3とも関連する「ビブリオバトル」という書評スピーチコンテストに注目し、調査を進めた。

ここでは、全国大学の「ビブリオバトル」コンテストの決戦に出てくる動画データを数年分分析した。その結果、話し手と聞き手に共通する考えや感情等に言及して、両者が共有する理解基盤を顕在化させる「コンテキスト共有」という行動が見られることが明らかになった。(業績番号:学会発表)話し手と聞き手が共感を作るという行動は、他のジャンル、例えば本研究で対象にしてきている式辞スピーチやアカデミックプレゼンテーションなどでも見られるが、その方法には違いがあることも示唆される。

4.1.2 パブリックスピーキングのジャンル

における言語による差異の検討

同じジャンルでも、言語による差がある可能性がわかり、それを検証する目的で、中国語の式辞スピーチのデータ収集を行い、ジャンル分析の手法で、分析を行った。

日本語の式辞スピーチでは、聴衆への働きかけを行い、話し手と聞き手の共感を高めることがこれまでの分析で観察されていた。中国語の式辞スピーチを分析した結果で最も大きい違いは、この聴衆への働きかけの仕方である。呼びかけが多く出現することがわかったが、それ以外にも、中国語式辞スピーチに特有なものとして、中国の伝統的な韻文を用いて、強く聴衆に働きかけていることが観察された。これらのことなどから、中国語式辞スピーチでは、日本語式辞スピーチとは異なる方法で、聴衆への働きかけを行っている可能性が示唆された。(業績番号：雑誌論文)

4.1.3 新しいスタイルのパブリックスピーキングの調査分析

4.1 の内容とも関連するが、新しいスタイルのパブリックスピーキングとして、「ビブリオバトル」を取り上げ、様々な角度から調査分析を行った。

パブリックスピーキングで重要なのは、いかに聴衆に働きかけを行い、それぞれのジャンルごとの目的を達成できるかということである。その意味で、「ビブリオバトル」では、自分が勤める本の内容を5分間でスピーチし、聴衆の投票で最も多く票を集めた本が「チャンプ本」となる、というルールであるために、「チャンプ本」となったスピーチが説得に成功したものと認定することができる。

このような考え方で日本語母語話者や日本語学習者の「ビブリオバトル」のデータを分析したところ、聴衆への働きかけを効果的に行い、業績で述べた「コンテキスト共有」が成功することが、「チャンプ本」となることにつながる可能性が明らかになった。(業績番号：大会発表)

4.1.4 パブリックスピーキングのシラバスや教授法の検討

本研究の最終目標は、パブリックスピーキングの指導をどう外国人のための日本語教育に応用するかを検討することである。

現在のグローバル化が進む世界では、変化の速いこの時代に、自らあるいは他人と協働して課題発見から課題解決を行うためのスキルの指導が必要だとされている。これらのスキルは、最近では21世紀型スキルと呼ばれているが、この21世紀型スキルにおいて、スキルの記述文にパブリックスピーキングに関連する内容があるかどうかを分析したところ、他人に自分の考えを理解してもらうことの重要性や、そのために必要となるコミュニケーション、あるいはコラボレーション

などの方法の記述が多いことがわかった。このことと、パブリックスピーキングの能力は大きく関係することが明らかになった。(業績番号：雑誌論文)

さらに、日本語教育におけるパブリックスピーキングの指導例を検討し、具体的な教材として提案も行った。(業績番号：大会発表)

以上の研究から、パブリックスピーキングには様々なジャンルがあり、これらの特徴を、言語や文化による異なりを意識した上で、教育に取り上げることが、日本語学習者のみならず、日本語母語話者にも新しい時代にふさわしいスキル伸長に寄与することが明らかとなり、今後ますます重視されるべきスキルであるという結論に至った。

4.2 今後の展望

本研究では、パブリックスピーキングのジャンルやその特徴と具体的な教授法などを中心に分析を行った。このプロセスで重要なこととして浮かび上がってきたのは、パブリックスピーキングで重要なのは、聴衆への働きかけを行い、ジャンルが各々持っている目的を如何に効果的に達成するかということである。つまり、如何に効果的に聞き手への「説得」が実現するかということが、カギとなる。「説得」の成功には、様々な要素が含まれているであろうが、まだパブリックスピーキングにおける説得のプロセスについては、それほど詳しい研究が行われていない。次の研究として、パブリックスピーキングにおける「説得」を取り上げ、非言語行動も含めた要素の抽出とプロセスを明らかにすることが、課題となる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

深澤のぞみ(2017)「日本語教育におけるパブリックスピーキング -21世紀に必要な学びの一つとして-」『金沢大学留学生センター紀要』第20号, pp.1-19, 査読無
深澤のぞみ・陳会林(2016)「中国語識字スピーチの構成要素と展開パターン -日本語式辞スピーチとの比較-」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』第8号, pp.45-58, 査読無

[学会発表](計5件)

深澤のぞみ・札幌寛子・濱田美和・深川美帆(2017.5.21 予定)「大学初年次留学生のためのアカデミックジャパニーズ総合教材の開発, 2017年度日本語教育学会春季大会(東京都新宿区・早稲田大学), ポスター発表, 審査有
深澤のぞみ・山路奈保子・須藤秀紘(2015.11.19)「外国語教育におけるビブリオバトルと「説得」」計測自動制御学会 シス

テム・情報部門学術講演会 2015 (北海道函館市・函館アリーナ), ポスター発表, 審査有

山路奈保子・深澤のぞみ・須藤秀紹 2015.11.19) 「中級レベル日本語授業におけるパブリックスピーキング指導 「コンテキスト共有」に着目して」計測自動制御学会 システム・情報部門学術講演会 2015 (北海道函館市・函館アリーナ), ポスター発表, 審査有

札野寛子・深川美帆・深澤のぞみ・濱田美和 (2014.10.12) 「アカデミック・ジャパニーズイメージモデルと新規教材開発に向けての既存教材の特性分析」2014 年度日本語教育学会秋季大会 (富山県富山市・国際会議場), ポスター発表, 審査有

山路奈保子・深澤のぞみ・須藤秀紹 (2014.6.1) 「パブリックスピーキングにおけるコンテキスト共有 「ビプリオバトル」の導入部の観察から」2014 年度日本語教育学会春季大会 (東京都八王子市・創価大学), 審査有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深澤 のぞみ (FUKASAWA NOZOMI)
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号: 60313590

(2) 研究分担者

須藤 秀紹 (SUTO HIDETSUGU)
室蘭工業大学・工学研究科・准教授
研究者番号: 90352525

山路 奈保子 (YAMAJI NAOKO)
室蘭工業大学・工学研究科・准教授
研究者番号: 40588703

(3) 研究協力者

テキ トウナ (ZHAI DONGNA)
中国, 北京師範大学

陳 会林 (CHEN HUILIN)
中国, 西安電子科技大学